



JSPS BONN OFFICE

日本学術振興会ボン研究連絡センター

ニュースレター 2015年1月～3月 (ぼんぼん時計 No.47)

ピックアップニュース

- ①研究及びイノベーションに関する専門家委員会は研究拠点としてのドイツを高く評価
- ②4か国の学長会議が研究費削減に抗議、欧州委員会は削減を撤回
- ③ドイツ研究開発費が増加

その他のニュース

トピックス イベント報告

- ① 第11回日独学術コロキウムを開催
- ② ロシア学術機関との連携に向けた交渉のためモスクワを訪問

今後のイベント

センター長コラム

センターからのお知らせ

ピックアップニュース

研究及びイノベーションに関する専門家委員会は研究拠点としてのドイツを高く評価

研究及びイノベーションに関する専門家委員会(EFI)は2月25日、研究・イノベーション及び技術パフォーマンスに関する年次報告書を、メルケル連邦首相に提出した。その中で、特にドイツ連邦政府のハイテク戦略における、産学連携を促すためのイノベーション助成を評価している。また、2014年中に、高等教育分野での基本法(憲法に相当)の修正、ドイツ連邦による奨学金の資金負担、「高等教育協定」及び「研究・イノベーション協定」により、学術政策においてより重要な決定が進んだことにも言及している。

その他以下のような事項について言及がなされた。

- ・州政府に対し、ドイツ連邦奨学金の負担軽減により生じた余剰資金を、大学の運営費交付金の確保のために運用するよう勧告
- ・ハイテク戦略は、国のイノベーション戦略として、どのような市民参加が効果的か、イノベーションを促進する効果的な環境条件とはどのようなものか等の重要な課題が確認できたことを評価
- ・教育、学術及び研究は今後最重要視すべき分野の一つであるとし、デジタルメディア、特に、いわゆる MOOCs(大規模オープンオンラインコース)に対する助成をさらに強化するべきと指摘

BMBF: <http://www.bmbf.de/press/3742.php> (25 Feb. 2015)

4か国の学長会議が研究費削減に抗議、欧州委員会は削減を撤回

フランス、英国、オランダ及びドイツの学長会議は、欧州委員会がホライズン2020の予算を約27億ユーロ削減するという計画に対して抗議した。削減された予算は、新しい「欧州戦略投資資金(EFSI)」に統合され、欧州地域の私的投资を集め、経済を後押しするために利用されることになっている。

これに対し、ドイツ大学長会議(HRK)ヒップラー会長は概ね以下のように述べた。「私的投资によるファンドはホライズン2020の目的の一つであり、予期なく削減されるべきではない。また、教育研究分野からの採択率が明示さ



れておらず、募集要項もなく、選考委員に専門家もいない状況のもとで、ドイツの大学ではプロジェクトの申請提出さえも認可されない可能性もある。」最近では、アジアが研究開発にヨーロッパの2倍の予算を投資しており、27億ユーロの研究費削減計画により、欧州の国際競争は致命的になると主張されている。

欧州委員会は上記の学長会議の要求に応じ、ホライズン2020の削減を撤回することにした。

HRK: <http://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/rectors-conferences-warn-that-europe-is-an-endangered-research-site-3668/> (26 Feb. 2015)

ドイツ研究開発費が増加

ドイツ学術財団連盟が公表した2013年のドイツ研究開発費は、前年比1.3%増の802億ユーロであった。特に大学において3.2%増、研究機関において6.7%増と顕著な上昇がみられた。本統計には、マーケティング、販売、新製品企画、施設への投資も含まれている。特に、車両製造、電子データ処理、遠距離通信網、電子、化学、製薬産業といった分野が伸びている。また、中小企業(従業員が500人以下)の研究開発費は2012年比4.6%増と、平均以上の増加率を示している。

BMBF: <http://www.bmbf.de/press/3730.php> (23 Jan. 2015)

その他のニュース

ドイツ学術交流会(DAAD)が組織改編

本会のパートナー機関の一つであるドイツ学術交流会(DAAD)が、2015年1月に大幅な組織改編を行った。これまで地域ごとに部署を区分していたが、標準化と効率化のため組織を再構築し、より良質で透明性の高いサービス提供に努めていく、としている。

主な変更点は以下のとおり。

- ・個人向け奨学金プログラムを一つの部署に統合
- ・協力・連携プログラム、基盤的高等教育助成及び国際的な教育プログラムの全てを一つの部署が管理
- ・DAADの持続的な発展と国際高等教育分野の専門知識を提供するため、新しく戦略部門を設置

これにより、もっとも優秀な学生、研究者に支援を提供できるようになり、高等教育パートナーシップや基盤的なプログラムをより戦略的に推進することが期待されている。



DAAD: <https://www.daad.de/der-daad/organisationsstruktur/reform/en/33464-ready-for-the-future-the-reorganisation-of-the-daad/>



2014 年エラスムス・プラスに 18,000 名参加

2014 年、Erasmus + (エラスムス・プラス)への参加者は約 18,000 名となり、前年より 12.5% 増加した。州単位では、ノルトライン・ヴェストファーレン州からの 4,300 名が最も多く、次いでバイエルン州の 2,800 名となっている。人気の留学先は英国、スペイン、フランス、アイルランドである。

欧州連合によるエラスムス・プラスは、2020 年までの 7 年間に約 148 億ユーロの予算を投入し、400 万人以上を対象に青少年育成の機会を提供する。

BMBF: <http://www.bmbf.de/press/3713.php> (9 Jan. 2015)

ドイツの大学における国際化強化

2014 年、ドイツの大学約 300 校と、150 カ国とのパートナー大学約 5,000 校との間に、約 31,000 件の国際連携が成立しているとの統計が発表された。この半数以上がエラスムス・プログラムにおける交流を基にしており、欧州の学術国際協力における当プログラムの重要性を表している。また、ドイツの大学において国際交流は積極的に行われているが、大学の種別により差がみられる。専門大学及び芸術・音楽大学では、外国人職員の割合が上昇し、高い国際交流実績を示している。

DAAD: <https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/de/32729-deutsche-hochschulen-schaerfen-ihr-internationales-profil/> (13 Jan. 2015)

大学における学位取得コースが増加、入学制限についても安定

ドイツ学長会議(HRK)によると、ドイツの大学において今学期約 17,000 の学位取得コースが設置されており、特に修士課程コースの増加が著しい。また、学士課程の約半数、修士課程の約 3 分の 2 においては入学制限を設けておらず、比較的安定していることが報告されている。特定の資格取得コースを除き、大学及び専門大学の約 99% のコースではディプロームやマギスターといった伝統的な学位ではなく、学士及び修士等の学位取得が可能となっている。なお、2013 年度の卒業生数は 40 万人に上り、10 年前の 2 倍に増加している。

HRK: <http://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/new-hrk-data-more-degree-programmes-stable-admission-restrictions-3641/> (2 Feb. 2015)

ホライズン 2020(EU 研究枠組み計画)採択プロジェクトへのドイツの高い参加率

ホライズン 2020(EU 研究枠組み計画)は、EU 国間の研究格差の縮小と競争力強化を目的とした新しい助成プログラムの採択結果を公表した。採択された 31 件中、ドイツは 21 件にかかわっており、高い参加率を誇っている。その中には、ポーランドの研究者とフランホーファー協会が参加するコンソーシアム、キプロス共和国での研究拠点設立を支援するマックス・プランク協会のプロジェクトが含まれる。研究領域は多岐に渡っているが、今回のプロジェクト対象地域にとって、ドイツの卓越した学術や技術革新力を得ることができ、他方ドイツにとって地域を超えた新しい研究協力の可能性を開拓することができるという点で、双方にとって利益があると期待されている。

BMBF: <http://www.bmbf.de/press/3733.php> (2 Feb. 2015)



外国大学との戦略的パートナーシップ促進のための助成プロジェクト採択を発表

連邦教育研究省(BMBF)の助成によるドイツ学術交流会(DAAD)のプログラム「戦略的パートナーシップとテーマ別ネットワーク」において、26 大学、28 件のプロジェクトが採択され、4 年間で最大 100 万ユーロの支援を受ける。このプロジェクトにより、ドイツの大学と外国の大学との間のパートナーシップの発展と定着が期待されており、計 39 か国からの外国の大学が参加している。

DAAD: <https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/de/33358-naechste-generation-strategischer-partnerschaften-geht-an-den-start/> (12 Feb. 2015)

国際ランキングがドイツの大学を高く評価

英国の高等教育専門誌 Times Higher Education(THE)が "World Reputation Rankings 2015"(世界大学評価ランキング 2015)を発表した。ドイツは 100 位以内に 35 位のミュンヘン大学を先頭に、38 位のハイデルベルク大学、41 位のフンボルト大学ベルリンなど計 6 大学がランクインし、この数は米国と英国に続いて多い。

国際ランキングにおける高い評価は、他の高等教育統計のデータでも裏付けられている。ドイツでは、外国人留学生や研究者の数が増え続けており、最も重要な非英語圏の受入国となっている。連邦統計庁によると、先の冬学期には約 32 万人の外国人留学生がドイツの大学に在籍しており、これは昨年に比べ 6% 上昇している。ドイツは、2020 年までに 35 万人の外国人学生を受け入れるという連邦政府及びドイツ学術交流会(DAAD)が定めた目標に予定よりも早く到達すると考えられている。

DAAD: <https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/de/33610-internationales-ranking-bescheinigt-deutschen-hochschulen-einen-exzellenten-ruf/> (11 Mar. 2015)



トピックス イベント報告

第 11 回日独学術コロキウムを開催

日時: 2015 年 1 月 14 日(水)~16 日(金)

場所: ゲッティンゲン大学(ゲッティンゲン市)

2015 年 1 月 14 日から 16 日の 3 日間、ゲッティンゲン大学、人間文化研究機構と共に第 11 回日独学術コロキウムがゲッティンゲンにて開催された。

本コロキウムは、毎年テーマを変え、日独双方の第一線の研究者による充実した討論を行うことに主眼が置かれており、今年度は、「人文社会科学分野における知識移転」と題して行われた。

本コロキウムは初日に一般公開で行われるオープニングセッションと、二日目以降の小研究会の二部構成で行われた。

オープニングセッションは、ゲッティンゲン大学の大講堂(Aula)で行われ、ゲッティンゲン大学 Hiltraud Caspar-Hehne 副学長、人間文化研究機構小長谷有紀理事等による挨拶に続き、理化学研究所入来篤史教授による最新の脳科学についての基調講演、チュービンゲン大学 Markus Pudelko 教授による多国籍企業における知識移転についての基調講演が行われた。

二日目以降の小研究会は、かのカール・フリードリヒ・ガウスが天文台長を務めていたことで有名な Historic Observatory にて行われ、「人文社会科学分野における知識移転」について 8 つのテーマに分け、参加者がそれぞれにプレゼンテーションを行い、議論を行う形で進行した。

参加者は、文化人類学者、経済学者、社会学者など多岐に渡り、それぞれの分野の垣根を越えて、白熱した議論が二日間に渡って行われた。

プログラム詳細は[こちら](http://www.jspsbonn.de/veranstaltungen/kolloquien/2015-knowledge-transfer-across-borders-integrative-approaches/) <http://www.jspsbonn.de/veranstaltungen/kolloquien/2015-knowledge-transfer-across-borders-integrative-approaches/>



日独学術コロキウム会場(Historic Observatory)



参加者集合写真



日独学術コロキウムの様子

ロシアの学術機関との連携に向けた交渉のためモスクワを訪問

日時: 2015 年 2 月 18 日(水)~20 日(金)

ボン研究連絡センターは、日露の学術連携の強化に向けて、2 月 18 日から 20 日にかけてモスクワ国立大学、ロシア人文科学基金(RFH)、ロシア基礎科学財団(RFBR)及びロシア科学アカデミー等を訪問した。



ロシア人文科学基金(RFH)フリドルヤノフ総裁と会談



本会と覚書を交わしたパートナー機関であるロシア基礎科学財団(RFBR)とは、現在採択されている二国間共同研究事業等の評価や、より効果的な事業の実施等について協議し、引き続き日露学術連携の強化に向けて協力することとした。また、ロシアにおける人文社会科学分野の研究資金配分を担うロシア人文科学基金(RFH)のフリドルヤノフ総裁と会談し、ロシア基礎科学財団(RFBR)がカバーしていない人文社会科学分野における日露共同研究の支援に向けて、覚書の締結を含めた具体的な協議を進めることについて打診を受け、引き続き交渉を進めることとした。

さらに、ロシア科学アカデミーのゼリヨーニ副総裁を訪問し、本会の日露共同研究支援制度及びフェローシップ制度の概要について説明し、ロシア国内の研究者に対する広報等に協力を求めるとともに、今後の協力可能性について意見交換の機会を得た。

なお、モスクワ国立大学と東北大学との数学分野におけるジョイントセミナーに参加し、日本における研究事情及びJSPSの事業紹介を実施し、現地の研究者から高い関心を得た。

今回の訪問を通じて、ロシア側の学術機関や研究者から、日本との共同研究及び日本での研究機会について高い関心やニーズが示され、今後の学術連携強化に向けて大きな可能性を感じられた。



ロシア科学アカデミーゼリヨーニ副総裁と会談



モスクワ国立大学と東北大学とのジョイントセミナーの様子

今後のイベント

5月8日(金)～9日(土) 日独学術シンポジウム(ボン)

5月20日(水) ボン大学留学フェアに参加(ボン)

6月27日(土)～29日(月) リンダウ・ノーベル賞受賞者会議に出席(リンダウ)

8月27日(木) ドイツ語圏日本研究者会議におけるJSPS同窓会会員とのネットワーキング(ミュンヘン)

9月2日(水) JSPS Abend及び日本語研究者ネットワーク連絡会議(ボン)

10月6日(火)～8日(木) ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会設立20周年記念東京シンポジウム(東京)

10月31日(土) ジュニアフォーラム(ボン)

11月5日(木) 渡日プログラム説明会(デュッセルドルフ)

12月9日(水)～10日(木) 日独学術コロキウム(キール)



センター長コラム

ドイツ学術の国際的プレゼンスを高めようと、連邦政府は大学間の向上志向環境を醸成するための競争的経費予算を定常化しようとしている。連邦制のドイツの場合、高等教育の基本的経費は州政府が保証し、連邦政府が配分する競争的経費は、いわゆる外部資金となる。財源が異なるので、競争的経費を増やすために基礎運営費を減らす、という流れにはなっていない。州によっては、獲得外部資金の増に伴う間接経費増を補うために基礎運営費を増やすところもある。

アメリカでは殖民時代からの伝統で、自分達の地域・集団の将来のために、自分達で教育水準を高めようとする民間の努力が大きかった。ドイツでもアメリカでも、地域・集団が競争母体となって、自分達のより良い将来のため、教育に資源を注ぎ込んできている。日本でも江戸時代まで各藩が置いていた藩校やその後の伝統的私学塾は、それぞれの校風を競い、優秀な子弟を生み出した。教育という営為では、世代にわたって効果が増幅されていく。良い教育は優れた子孫を残し、優れた子孫は更に良い教育を志向する。

日本の国立大学がここ十年來置かれてきたような、基本的経費を削って競争的経費に回すプロセスでは、重点化・集中化を通しての競争的分別機能は発揮される。しかしこのような分別過程に、果たして質的な向上が保障されているのだろうか。「競争のための競争」にコストが掛かり過ぎて、むしろ教育・研究の大きな阻害要因となってきてはいないか。しかも性急な重点化は、極度の集中硬直化とそれに伴う「行き詰まりリスク」をも背負い込み、将来の新たな発展の素となる学問の多様な芽をも摘み取ってしまうのではないか。

現時点での個性や企画に応じて国立大学を分別・再編するにしても、いずれの集団にも将来の新たな芽を育てられる余地を残すべきであり、また異なる個性の大学間での教員・学生の適切な流動性を保障する仕組みも欲しい。今の細分化された地方の国立大学法人の経営基盤は、いかにも脆弱である。欧米と日本では歴史的経緯も地勢的要素も異なるが、日本なりに、すこし立ち止まって再点検し、地域・集団が夢を託せる国立大学法人の仕組みと財政の在り方を工夫したいものである。

(小平 桂一)

センターからのお知らせ

3月末で、前小屋国際協力員、中沢国際協力員が任期を終え、それぞれ東北大学、東京工業大学に帰任しました。4月からは新しく、東京大学から佐々木国際協力員、広島大学から田尾国際協力員が着任しました。

ドイツのパートナー機関との連携をますます密にするとともに、ドイツの高等教育、学術情報を引き続き発信してまいります。



JSPS Bonn Office

日本学術振興会ボン研究連絡センター



旧市街地の桜並木

4月中旬、ボン旧市街地の桜並木が満開になりました。インターネットでも話題になるほどの桜並木だそうで、延々と続く桜のアーチは見事なものです。日本の桜とはまた違った雰囲気で、濃いピンクが華やかに街を彩っていました。

日本に限らず花見は全世界共通のようで、桜並木沿いの広場では、音楽を奏で、ダンスを踊って春を喜ぶ人々であふれており、週末の旧市街地は大変な賑わいを見せっていました。（田尾国際協力員）

日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Wissenschaftszentrum

Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)

Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)

Tel. +49(0)228-375050

Fax +49(0)228-957777

www.jsps-bonn.de